

ラファア支援「焼け石に水」

【エルサレム＝福島利之】パレスチナ自治区ガザの最南部ラファに入った国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）の清田明宏・保健局長は「支援を続けているが、焼け石に水の状況だ」と打ち明けた。食料も薬も不足する中で感染症が広がる危機的な人道状況を目の当たりにし、国際社会に対して停戦や復興の必要性を訴えた。

△本文記事2面▽

■その日を生きる

清田氏は、UNRWAが運営する保健所や避難所を巡回し、職員らからの聞き取りなどで現地の状況を調査している。北部ガザ市からラファに避難してきた旧知の40歳代の保健所職員は、清田氏にこう訴えた。

UNRWA局長

「全てが壊された。私の内面も壊された。今日のことだけは考えられるが、明日のことは考えられない」

清田氏は、多くの住民から「私の内面が壊れた」という言葉を聞いた。戦闘開始から半年近くが過ぎ、「皆が疲れ果てて心が折れ、途方に暮れながら、その日を

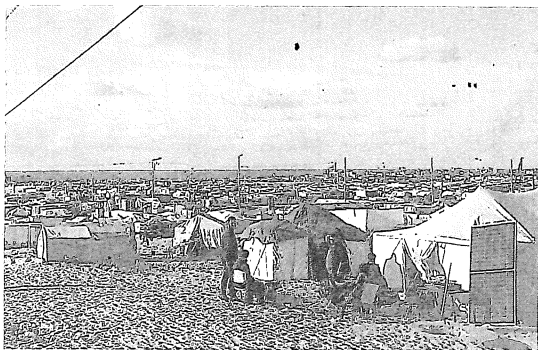
の日を生きている」と受け止めている。

イスラエル軍は、約150万人の避難民らが身を寄せるラファにも本格侵攻する構えを見せている。ガザ北部や南部ハンユニスと比べると建物が残っているが、空爆は続いている。ガザに安全な場所はない。

■避難場所を転々

清田氏によると、保健所で働く女性医師(29)は昨年10月、歯科医の夫や3歳と1歳の子供を連れて、ガザ市からラファに逃れてきた。これまでに避難場所を12回変え、3日間は道で寝た。今は保健所の一角で寝泊まりする。

夫は戦闘が始まった翌日の昨年10月8日にガザ市で歯科診療所を開業する予



24日、避難民が身を寄せるガザ最南部ラファの海岸近くのテント村（UNRWAの清田明宏・保健局長提供）

「皆が疲れ果てた」／汚水で肝炎流行

定だった。借金して高額な治療機器を買いそろえたが、診療所と自宅は破壊された。「これからどうやって生きればいいのか」。女性医師は涙を流したという。

■水は1日500リットル

UNRWAの学校には、教室や家庭に4万人が避難している。食料は支援物資が頼りで、飲み水は1日あたり1人500リットル。トイレットは16リットルしかなく、1基あたり2500人が利用している。汚染された水で感染するA型肝炎が流行し、黄だんの症状が出ている子供がいる。栄養失調の子供は1割を占める。

保健分野でUNRWAは、感染症防止や栄養補給、精神衛生のケアを中心に支援する方針だ。清田氏は「これほど人間が虐げられているのか。国際社会はガザの人々が安全に暮らせる社会を復興させる責任がある」と訴えた。